九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

仕形咄考

中村，幸彦

https://doi.org/10.15017/12149

出版情報：語文研究. 37, pp.85-92, 1974-08-31. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

仕形咄考

中村幸彦

仕形咄なる語は、落語史研究の上で、採上げられ、今日に伝はる落語の、身振りとか仕草とか称される演出の、初期の試みとして、問題となつてゐる。既に云はれる如く、元禄二年の『江戸図鑑綱目』や、同三年の『江戸総鹿子』に、長谷川町鹿野武左ヱ門・横山町三丁目休慶・中橋きやら小左ヱ門・同四郎斎などの咄家の芸を、「座敷仕方咄」、「しかた咄」と呼んでゐる。その中の一人、鹿野武左ヱ門の咄を集めた『鹿野武左ヱ門口傳はなし』の序にあたる文章には、

爰に志賀武左ヱ門とて、はなしにすける者ありて、……こゝかしこと御伽に召るゝ、あるは見し事聞し事、或は露跡形もなき事をも笑舗仕かたして、はなし出る事危たゝなり、しかあれど、もとよりむまれは津の国の難波のよしあしもしらず、片言まじりなるを筆にまかせて、かいやり……

ともある。また同じく『鹿の巻筆』に収まる咄には、全く落ちを伴はないものも少くない。これらの演出は、仕形で笑はせたものと思つてよい。そして江戸では、その後も、

それはなしは、壹がおち、弐が弁説、三がしかた、ことに当世は、いにしへのそろりなどの噺の風俗とはかわりて、かるロにおかしくしどけなく、利をつめげびたよふできやしやなり（元禄七年『正直咄大鑑』白之巻）

と、三要素に数へられて、殊に仕形が重んじられた如くである。元禄期の江戸の落咄が、仕形咄と称された前後の事情を、若干うかがつて見るのが、この小文の目的である。

○

仕方咄または「身振り」を意味する仕形なる語が、早く狂言に見えることは、古川久氏の、『狂言辞典』以来、辞書類に所収の処である。ここでもやはり掲げて見れば、

迚の事に、仕形を致し、学うでお目に掛ませう（虎寛本狂言「千鳥」）

いかな仕方咄なればとて、某の首を討おとす真似をするといふ事は有物か（雲形本狂言「空腕」）

の如くである。ここに問題は二つにわかれる。一つは、これらの会話で、普通日常語として、仕形・仕形咄の語が使用されてゐたこと。今一つは、狂言なる芸能が、仕形・仕形咄を、その

演伎の一つに加へてゐたことである。前者の、日常語としての使用は、江戸時代を通じ、上方・江戸に渡り、広く行はれてゐる。

おもしろき仕方咄や富士の雪（寛文五年『小町踊』）

「仕方はなしをするおとこ山」「莨岩盆有こし物を取てのけ」（延宝六年『物種集』）

拍子に乗て仕かた咄してござるてさ（天保六年『増補花大樹』三）

今此すいなよの中に、なにかはいらぬ、これ〳〵と、れいぜい十五や、しかたにて、もどかしがれば、ひめ君はやう〳〵に心づき、したぎをふはとうちきせて、じつとしめたるしたひもは……（元禄三年『十二段』三）

一向に詞通ぜざれば、……様々の仕方しても、わかつべふもあらざれば（宝暦十三年『風流志道軒伝』三）

などである。がこれら日常語は、今の問題からは、省略してよかるべく、芸能上の今一つの問題に限ることとする。

先づ落咄と仕方咄なる語の結びつきは、武左ヱ門等より、更に早く、万治二年、京都での刊行、その名さへ『私可多咄』であることは、これ又有名であるが、やはりそこから出発すべきであらう。編者中川喜雲の序には、

酌かはすさゝのたはぶれに竹冠をして、予がひがめる犬の字をくはへ（＝笑として）、友にもてあそばしめんとす、あやまつ事は、もとほらぬ舌がなす所と、をしてはかりたうびよ、さればわかちめあざやかならねば、しかたばなしになんしけるを、人の需に応じ……

とある。云ふ所は、弁舌をもつてしては、よく通じ難い処々は仕方咄にして見せるやうに、話を作つてあるとの意である。よつて実際の作品にあたつて見る。その例の一、二は既に掲げたことがあるが（学燈社編『落語のすべて』所収拙稿「落語の文芸性」）、ここでは他の例を引かう。

昔はじめて茶のゆに行もの有、（…茶の湯の作法は上座・下座がむつかしいから、人々の真中に居よと教へられて…）すきやへはいりぬる頃、四方を見あはせ、いろりのそばのまん中になをりけるに、意地のわろきあいきやく共にて、何ともいはずだまりければ、亭主見て、中の〳〵のごばうたちはなぜに、せいがひくいぞと云た

ここでも、数寄屋へ入る所から、囲炉裡の所に座るまでは、下手に滑稽に茶の湯の作法をまねてして、その座した様が、今日にも残る童遊びの「中の〳〵小坊さん」の、中央にかゞんだ子供の如くになる。そして、亭主がよろしく節をつけて「……なぜせいがひくいぞ」と云ひ終ると、昔と今では多少遊び方も違つていたであらうが、大体「歌い終れば中の子供立ちて、まい〳〵こんぼをなし、周囲の子供しよづくなり」（『日本児童遊戯集』）のやうな仕形をして落ちる。即ち今日の「仕形落ち」をねらつたもの。もつともらしい茶の湯の下手な型から、たわいない童遊びに変る、おかしさを考へての作であつたらう。

昔色このみの男有、（…さる方からのきぬ〴〵に、暗いうちなので寝間着にした紅鹿子の小袖を重ねて帰つた。本宅で山の神に見つけられ…）、このきる物は、いづくの女らうめがわんぼぞとせめとがめければ、男べにかのこの小袖みておどろき、さて〳〵そつじなる事と思ひ、何ともいふべきやうも

なく、あづきめしがくひたい、われはきつねじや、こん〳〵くわい〳〵といふてやぶの中へかくれた

では、狂言の「こんくわい」の幕切を、紅鹿子の小袖を着たつもりで、して見せる滑稽をこの作は指示してゐるのである。

『私可多咄』では、謡曲・仕舞・茶の湯・十炷香・源氏酒・かるた・鞠・香、さては童遊び・童の所作など、当時の人の教養であつた芸をあつかつたものが甚だ多い。謡曲仕舞の場合や童遊びなどは、仕形と共に発声をして聞かせることも含まれてゐるのである。もつとも、この書には、

昔法花宗あり、何ものによらず、じゆほうさせたく思ひ、（…飼猫を改宗させようと…）八巻をいたゞかすべきとて、ねこをとらへんとすれば、はしりてえんの下へはいりけるを、つなとりて引ぬれば、中々ねこつなになり、いろ〳〵してみれどもいでず、よべども聞いれず有ければ、（…これを見てゐた人が、「それほどじやうがこわくては、はやほつけであらうといふた」）

など、普通の仕形ですますものもいくらかは含まれてゐる。しかしこの『私可多咄』なる書は、その序と照合して考へるに、その読者に酒席などで、平生それ〴〵が教養・娯楽に習つてゐる芸を、仕形でもつて示す落咄の方法を教へることをも、一つの目的としたものと考へてよい。

『私可多咄』の変つた教訓が、どれだけ実際に浸透し、実行されたかは、知るべくもないが、上方では落咄以外の話芸にも仕形を採用したことは想像することが出来る。

あふぎにて高座をうちたゝき、こつぷりうちふりて、高声にさけび給ふしかたを見たるばかりにて、理りを聞しらねば、是にてたすかるべきともぞんじ候はず（寛文二年『為恩癖物語』三）

とあるのは、貞安和尚と称する説教僧を、最上兵衛なる古ばくち打の評した語である。これは作中のこととしても、当時説教僧なども、はでな仕形咄をしてゐた一証ではある。正徳五年上演の近松作『大経師昔暦』に登場する、太平記の講釈師赤松梅龍は、次の如く描写される。

あの梅龍ももう七十でも有ふが、一りくつ有顔付、アゝよい弁舌、楠湊川合戦、おもしろいどう中、仕方で講尺やられた所、本の和田の新発意を見る様な、いかひ兵でござつたのこの赤松梅龍を、関根正直著『軍談落語源流』（『花散る里』による）所引『諸芸目利咄』なる書に見えると云ふ「浪花に梅龍」とあるを指すかどうかは問題が存するが、仕形で講釈をする人物の存在したことは信じてよからう。とすれば、落咄に於いても、次第に専門家が出現して、それらも仕形を折込んだことは勿論あつたであらう。『軽口露がはなし』は、上方の専門家のはしりとも云ふべき、露の五郎兵衛の著であるが、それには、「船のしかた」（巻四）の如く、酒席での不始末を、

…かの手をさし出た人はづかしく、てにはあしくて、もうし何れも様、沙汰はなひ事、此私が手は舟によく似ませぬかと、いふて引たり

の如く、「仕形落ち」で結んだ話が、いくつか目につく。これから思へば、他の咄では、『私可多咄』に見る、一々に仕形がわかる如くに作つてないのは、かへつて専門家には普通となつてゐたからである。常子内親王の御日記、元禄十二年五月十五

日の条には、露の五郎兵ヱを「きやうげんものまねのもの」と称し（『日本及日本人』第二三号所収森銑三氏「露の五郎兵衛」）、宝永七年の『御入部伽羅女』巻五の挿画に、「当せいしかたものまね、よねざわ彦八」と、その生玉境内の席の貼紙を示してゐるのは、歌舞伎などと混じた気味もあるが、もつて仕形の証とすることが出来る（芸能史研究会編『日本の古典芸能』9所収肥田晧三氏「大阪落語」所載）。ただし、上方では落咄を「仕形咄」と称した例はまだ見出されない。常子内親王の御日記でも、

露の五郎兵衛といふ名とりのかるくちはなしするもの也

とあり、『伽羅女』のその挿画にも、

かるくちはなしいろ〳〵

の貼紙も見える如く、この頃から、宝暦の頃までも「軽口ばなし」と云ふのが、そのまゝ上方での落咄のことであつた。

○

狂言に既に、仕形・仕形咄の演技があつたとすれば、歌舞伎やそれに類似の芸能に、それをとり入れない方が、初期歌舞伎と能・狂言との関係から見て、不思議である。その証を、無秩序にとり出して見る。

『京四條芝居間数并名代之事』から、

仕形舞物真似　夷屋松太夫（寛文九年名代赦免・元禄十三年名代譲り赦免）

仕形男舞　又太夫（元禄六年名代相続赦免）

『松平大和守日記』（若月保治著『近世初期国劇の研究』所収）からは、既に、郡司正勝氏（『かぶき様式と伝承』）や諏訪春雄氏（『元禄歌舞伎の研究』）が抄出されてゐるので、注目すべき若干にとゞめておく。

鏡の上　ゆうなん（＝道化方又男三郎兵衛）（しかたまねす）（寛文二年五月三日、堺町古伝内芝居の内）

しかたの鬼　庄之助・七左ヱ門　（寛文十三年十二月十三日、堺町の歌舞伎狂言のうち。歌舞伎には「しかたの与一」・「しかたの津島詣」など、題に「仕形」のつくものが多い）

しかた拍子舞（延宝五年五月二十六日の祝義に薪屋二郎兵衛狂言のうち。「永閑ぶしに」とある）

しかたはなし　九右ヱ門　（同八月十六日の奥慰の、前島二郎兵ヱ子供狂言のうち）

しかた上るり（元禄三年十月十一日、盲人門弥の八人座頭の芸）

大磯仕形踊（元禄四年六月十日、土佐少掾橘正勝の人形芝居のうち）

しかたごばん　吉右ヱ門（元禄七年正月十八日、碁盤人形の番組のうち）

しかた角田川　惣八、治右ヱ門上るり語（同歌舞伎芝居のうち）

と。京都の名代はしばらくおいて、歌舞伎、人形芝居その他でも様々の仕形が、延宝から元禄へかけての江戸で流行してゐた様はこれから想像できる。内で道化の仕形については郡司氏が、歌舞伎と仕形浄瑠璃の関係については諏訪氏が、それ〴〵演劇史の専門的立場からの検討をされてゐる。内容はそれに譲つてここでは少し例をかゝげて見ることにする。

『嬉遊笑覧』五には、

寛文二年寅正月廿日申渡の内、仕形舞・仕形説経・狂言尽しの分、屋敷方は不及申、町方にても一切脇ありき仕間敷候事（仕形舞といへば、所作あるを知べし）

の一条を引用する。この町触を、法制方面の記録から、まだ見出しかねてゐるが、これを信ずれば、仕形をもつ諸芸は、延宝

よりは更に早く寛文から流行してゐたのである。『為愚癡物語』の貞安和尚も、流行の仕形説経を試みたことに描写されたのであり、京都の夷屋の名儀も流行に応じたものであつたことになる。そして、その町触は殆ど効果なくして『大和守日記』に見る如き、武家方町方一統の流行となつた。上方でもしかりであつたか。西鶴の『世間胸算用』の巻三の目次には、「掛取上手の五郎左ヱ門、大晦日に無用の仕形舞」と題して、

ふるなの忠六といふ男、常にかる口たゝき、町の芸者といはれて、月待日まちに、物まねして、人の気に入ける

と云ふ男を登場させてゐる。仕形舞の一つの説明にもなり、又軽口ばなしと、仕形舞との関係をものがたせてゐる如くである。宝永三年には『風流仕形舞』なる書を出したのも、京の新板屋戌之助である。目録題には「付タリ座敷上留利」とあり、目録は、「物まね」づくしに作つてある。全体の内容の紹介は長谷川強氏の『浮世草子の研究』にのるが、この作は、太郎冠者が主君の前で、都の名所旧跡を仕形舞にて説明することで始まる。

おもしろの花の都や、筆にかくともおよばじ、東には祇園清水、をちくる滝の音羽の嵐に、地主の桜はかずちりて、かすみ色どる新熊の、いなりの山の春かゑで、うづら鳴成深草の…

などと、面白く舞ふ中に、仕形を入れたものであるが、これが当時のこの所作を、幾分かは伝へるものと思はれる。享保五年刊の八文字屋本『役者色仕組』は、歌舞伎色の濃厚な作柄であるが、その四之巻の目録は、「先々を語て廻る上るりで仕形道行」とあるのも、『仕形舞』の道行風の如きを云つたのでもあらうか。江戸に眼を転じると、今日も上演される歌舞伎十八番「鳴神」の源流『雷神不動北山桜』は、寛保二年大阪大西芝居で、二代目市川団十郎が演じたを初演とする。それには、今日もこの演技の中心をなす雲の絶間姫の濡の仕形話が、初めからあつたはずである。出来るだけ古い脚本を選んだと云ふ『評釈江戸文学叢書』の「歌舞伎名作集・下」所収から引用すれば、

此うち両人、思入れさま〴〵あり、このうち絶間姫仕方話しを立つてする、川渡りの思入れあるべし

で、この場面は初まる。そこにこの仕形咄が初めからあつたとするのは、その翌三年、この歌舞伎の影響をうけて、豊竹座で上演の浄瑠璃『久米仙人吉野桜』の絵尽しに「北山庵室の場」の説明が、

ト此うち両人、思ひ入れさま〴〵あり、このうち仕方話し立つてする

と書入れてある故である。今日のその場が、どれ程、寛保の古の面影を残してゐるか知るべくもない。しかし伝統的な歌舞伎の芸のことである。寛保の面影を、そしてその作の更に源にある、元禄十一年上演の『源平雷伝記』の第三のくだりの芸を伝へる処があるとすれば、元禄年間はもう、仕形の芸の盛時である。延宝元禄の歌舞伎における仕形咄を今の十八番の『鳴神』に想像しては、如何であらうか。

○

歌舞伎など諸芸の仕形を想像したのは、勿論落咄の仕形咄を想像する為のものであつた。『鹿の巻筆』の第五には、『鳴神』の、その場面に似て、行儀の悪い話が多い。それに『鳴神』の仕形を加へて、貞享の昔を想像するのも、話芸研究の方法とし

ては、悪くないやうに思ふのだが、如何であらうか。

鹿野武左ヱ門は、『口伝はなし』によれば、「もとよりむまれは難波の」云々とあつて、早くから大阪の人と考へられてゐる。成程、作中に、

我〳〵せがれのじぶんより上方にても、人がいふたが、見たるはこれがはつじや

と、登場人物に云はせたり（『口伝はなし』）、

奈良の京かすかな里にいた人じやさかいで、業平といふといわれた（『鹿の巻筆』・二）

陰陽和合の車の、わやくなるはなし（『同』・五）

など、上方語を混じてゐる処がかなり目立つ。しかし不審もないではない。それは、「え」と「い」、「へ」と「ひ」の混淆が、盛んに目立つ事である。

数ひ印などつけて

後生にもとづき給ひかし

此若衆をとねらひども

あなたこなたとうろたいける

火事はまたぐらじやと申ますが、へのこがふらり〳〵と参ります（これは、わざと地口にしたのであるが、「ひ」と「へ」の混淆の一例となる）

これは、日本海に面した地方の人々が知らずに、又意識することによつて却つて混淆すること、今日も経験する処である。彼の本貫又は親達の本国が、その方面であつたのではないかを思はしめる。しかしともかく彼は、大阪人たることだけを標傍して江戸へ下つたこと間違がない。それで話に上方語を、わざと挿入したのである。ただしこれは、武左ヱ門自らが、『鹿の巻筆』の原稿を書いたと想定しての説である。と云ふのは、かゝる例は、その頃の江戸版の咄本にも見えるからである。若干の例を上げると、

百姓のもとひ、よしありて禅僧の来たりけるに（『枝珊瑚珠』一・一、「宣」とあつて、石川流宣の作のはず）

雨をふらせ給ひかしといのる（『同』一・三、これは「鹿」とあつて、武左ヱ門の作）

山の芋は泥鰍に成と云さかいたべぬと云た（『同』三・一、「宣」）

さぶらひ筋のお人じやさかい（『正直咄大鑑』青の巻・三、ここは三つも「さかひ」があり、『鹿の巻筆』にもある「つけさしつつら」の例もある）

つめさしやる衆者さかい（『同』青之巻・八）

の如くである。この現象は様々と考へられるが、たとへ流宣作とあり、無名であつても、この特徴の見える章を、全部、武左ヱ門の作とすれば、『鹿の巻筆』と合せて、筋の通ることとなる。今後の課題に残して、「仕方咄」を考へる今は、この辺で留めておく。

大阪から下つた武左ヱ門、またはその一統は、折からの仕形の芸の流行に乗じて、自らの落咄を仕形の芸をもつて、口演した。その事は、『鹿の巻筆』一部を検討するのみで十分である。筆者の想像を加味すれば、その時、武左ヱ門は、喜雲の『私可多咄』を想起して、その方法即ち前述した、諸芸能の仕形を採入れる方法を、それから学んだのではなからうか。

巻一「ばんどうや才六」（双六）

〃　「三人論議」（将棋・かるた）

巻四「初心大黒舞」　（大黒舞）

の如きは、括孤のうちに示した諸芸の術語を沢山に入れてある。やはりしやべりながら、それら諸芸の仕形を試みたものと思はれる。大黒舞などは、そのことと歴然としてゐるが、双六・将棋・かるたなどは、『私可多咄』が、その仕形で落したりしたのとは、若干相違してゐるのは、武左ヱ門の、その諸芸の理解によるのでもあらうか。当時の上方の咄本同様、当然のこととして、詳記しなかつたのであらうか。更に芝居の仕形の芸を採用したものもある。

巻一「せりふの稽古」　巻二「にせ屋島」

巻三「堺町馬の顔見世」

の如きはそれで、「にせ屋島」の如きは、せりふを滑稽に似せてゐる処、後々の落咄にも見るものである。そして又、巻二「にせ屋島」、巻三「浅草観音梅の狂歌」などには、前者は江戸の町々を人を尋ねて廻り、後者は、浅草観音詣りの、地名や、景色を、リズムにのせることの出来る文章で並べ述べてある。これは前述した、「仕形舞」「仕形道行」の身振りを試みながら、節をつけて詠じたものと見てよい。この『鹿の巻筆』の挿画には、歌舞伎役者や操人形芝居の関係者が、登場する。これらの人々は、武左ヱ門の座敷咄と相伴つて、武家方町方へ出入した人々であつて、彼らとの間に芸の交流があつたことも、十分に考へてよい。勿論、普通の仕形も多い。しかし前述した落ちのないものは、仕形を主にして、演じたのである。ただし、武左ヱ門は、それのみの芸ではなく、

爰にはなしの武左ヱ門といふて、ふるなのべんぜつをもつてはなしに目連のしゆずをえたり、一休の軽口をまなび、竹斎がをどけばなし、そろりがとんさくの言葉にまさりたりとて

（『正直咄大鑑』赤之巻）

と云つた、多分に仲間誉めの気味があるが、豊かな才能をそなへてゐたとの評もある。しかしその仕形を芸の特色とした故をもつて、彼ら自らが、その落咄しに付したか、聴衆の方で称し馴したか、早くも仕形咄の称が一般的になつて行つた。それは『江戸総鹿子』などに見る処であるが、それは何時頃からであつたらうか。こゝに面白い例がある。延宝四年の『江戸両吟集』の付句、

ひとかいあまりすみよしの松　桃青
淡路島仕形ばなしの余所にみて　信章
とも呼鳥の笑ひごゑなる　桃青

で、信章素堂の淡路島の句は、住吉の松の大木を一かゝえ余りと、両手を広げた仕形で、これは「仕形ばなし」の日常普通の意味で付けたものである。淡路島を余所に見るのは、住吉の海岸の遠景をあしらつたのみ。それに付けた桃青芭蕉の句は、淡路島に対しとも呼びかふ千鳥をもつて付けたのだが、ここの笑ひが笑を呼んで、どよめきの笑声となつた「仕形ばなし」は、当時江戸で評判の新落咄の、仕形咄の席のことと理解しなければ、打越しとの変化がない。芭蕉の付句は、既に延宝四年に江戸に仕方咄の落咄のあつたことを知らせてくれる。もし鹿野武左ヱ門をもつて江戸の仕形咄の元祖とすれば、彼が大阪から下つたのは、それより以前、先づは延宝極初となるであらう。

○

それから江戸では、落咄即ち仕形咄とする風が、長く続いたやうである。安永二・三年、仕形を絵入で示した『仕形噺口拍子』初―四編なる、創作小咄本さへ出てゐるのである。しかし幕末には、なほ社地には、「仕形能」など、杜絶し勝ちながらあつたとはいへ（守貞漫稿）、仕方咄は遠い昔になつたのか。

文化十四年刊の『仕形はやしやつて御覧』は、十返舎一九作、勝川春亭画の合巻。毎頁開きに、落咄を一つづつのせ、その登場人物の、茶番さながらのおどけた仕形の一場面を画いて加へたものである。文政四年刊の『仕形落語工風智恵輪』（柱刻「しかたはなし」、尾題「仕形ばなし」）は丁度即席の茶番の如く、手軽な扇、本、箸、煙管、手ぬぐひの如きものを使用して、登場人物に相当した姿や動きを作りながら、咄を落にもつてゆくもので、共に落咄の上に、別の趣向を加へたものとなつてゐる。かつての名稱のみを応用した、新趣のものであつた。

其ものと少シ稽古のことがござりまして、只今私とその仕形噺をいたします所（文政八年『花暦八笑人』初・下）

とあるのは、茶番の仕形（立廻り）の相談と云ふ別の意のやうである。

そしてここに一言附しておくべきことがある。元禄期に起つたこの仕形咄の仕形が、狂講の方へも移入されて、あの『むらさきのゆかり』や『宝暦雑録』などに詳細に描写される志道軒の芸になつた。そのことなどをも合せ考へると、元禄の仕形咄は今日の東京古典落語に見るやうな洗練された身振の如くではなかつたらうと云ふ事である。むしろ上方落語のそれのやうに、動きの多い、又動きの大きい、はでなものではなかつたかと思はれるのも亦、武左ヱ門らの咄本から想像される処でもある。今日の東京落語の身振り仕草は、その後に文人達の咄の会を経、幕末の隆盛時へかけて、時代の風潮からくる洗練の結果なのである。

追記

福田先生御追善の集に、かゝる題を選んだのは、外から見ればやや違例であらう。実は、この考は、昭和四十八年五月、私にとつて御生前最後の御面晤であつた、天理大学での国語学会での講演で、お聞きいたゞいた一部に訂正加筆したものである。よつてその思ひ出を付して、謹んで御霊前に、お供へするのである。